文化と芸術
文化・芸術研究センターニュースレター
Vol.30
September 2019

CONTENTS

活動報告 SUAC Report
嚥下リハビリテーションチェアの開発
谷川憲司／デザイン学科 2
デザイナ育成のためのスケッチング・ツールの拡充開発研究
長嶋洋一／デザイン学科 3
学校における児童の多様な居場所づくりへの空間的試み
亀井暁子／デザイン学科 4
北アフリカフランス語小説を訳しながら ―「翻訳」をめぐる二つのこと―
石川清子／国際文化学科 5
「博物館学」＋「美術史」が愉しい 小針由紀隆／芸術文化学科 6
「自治体戦略2040構想」と地方自治の今後 ―魅力ある地域づくりと法学―
村中洋介／文化政策学科 7
年度研究事業一覧 8
インフォメーション 12

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中央区中央2丁目1-1 〒430-8533
●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●https://www.suac.ac.jp/

Art & Culture

デザイン学科長
迫 秀樹
Hideki Sako

何が変われば品が変わるか

「所変われば品変わる」という言葉がある。一般的には地域によって風習や言い回しが異なるときに用いられ，詰まるところ文化の違いを表している。私は授業で学生に対して，特に道具の違いを説明する際にこの言葉を用いるのだが，そのときにヒトの違いについても触れるようにしている。ヒトの違いと言っても，人類学では人種による分類で侃々諤々の議論があり，ヒトはそう簡単に分類できるものではないとされている。しかし，ある側面から見ればヒトそれぞれに違いがあることもまた事実である。文化の違いに興味を抱く学生や地域に応じたデザインを考える学生などは，ヒトの違いについて理系的な話だと遠ざけること無く興味を抱いてほしい。ここでは，その幾つかの例を紹介しつつ，授業との関連について述べていきたい。

まず，真っ先に紹介したい例は文化人類学者の川田順造先生による研究である。川田先生はレヴィ＝ストロースの弟子であり，『悲しき熱帯』を翻訳されたことでも著名な方だ。レヴィ＝ストロースと同様にフランスとアフリカで研究のフィールドを持った川田先生は，ニジェール川流域（アフリカ西部）に居住する人々の体格，姿勢，そして運搬方法などに着目した。私はその報告写真を見た際に驚嘆したのだが，ある69歳の男性は直立から背中へほとんど反ることができないのに対し，直立から前傾をしてもらうと腰の所で折れ曲がるかのごとく前屈ができる。立位体前屈の数値で示すと男性の平均が約20cmになる。これは，骨盤が日本人よりも前傾気味であること，そして太もも裏の筋肉が長く伸びることなどによって可能となっているようだ。そういった人々が使用している鍬は柄が40～60cmしかない。日本で鍬といえば100cm程度が多く，40～60cmは柄杓のイメージとなる。前屈が苦手な私にとって短い鍬は辛い道具なのだが，ニジェール川流域の人々は長時間の前屈姿勢でその道具を使いこなすらしい。まさに「所変われば品変わる」であり，ニジェール川流域の人々における骨格や関節可動域が大きく異なることから来る道具の違いである。

逆に日本を含むアジア地域で多く見られる深いしゃがみ姿勢は，欧米の人々には苦手な姿勢である。深いしゃがみ姿勢とは，踵を地面につけたままで臀部を地面に近い位置まで深く降ろす姿勢で，和式トイレでの姿勢と言った方が早い。これも和式と洋式というトイレでの姿勢が日常的に異なることが，得意な座位の違いに影響していると考えられる。近年では，深いしゃがみ姿勢をとれる日本人は減りつつあり，それもまた和式トイレの減少に伴った話と解釈されている。なお，深いしゃがみ姿勢は大人になって努力をすれば可能になるかというと，それには限界がある。そういった姿勢をとれない人は，関節内で骨同士が干渉するためにできないのであって，これは小さな頃からの積み重ねによって形成される骨の関節面によるものだ。

次に紹介したい例は生理的な違いである。人類学の古い研究で，耳垢のタイプはDry（乾性）かWet（湿性）のいずれかに分類されるというものがある。近年になって耳垢の研究は遺伝子の違いに踏み込んでおり，地域ごとに割合を示したマップが作成されていて大変興味深い。例えば日本では，Dryタイプの遺伝子を持つ人の割合が約89%となる。東アジアでは同じようにDryタイプが圧倒的に多い。ところが欧米ではDryタイプが半々以下に減り，アフリカにいたってはDryタイプが5%しかいない。ほとんどがWetタイプなのである。ここで察しの良い方はお分かりだろうが，使用する道具に違いが生じる。日本で耳かきと言えば煤竹を職人さんが薄く加工したものを高級品として愛好しているのに対し，欧米やアフリカではそういった耳かきは通用しない。一般に綿棒となる。

ここまで文化的な違いと身体や生理的な違いとの関わりを述べてきたが，こういった話は私が紹介するまでもなくご存じの方も多いだろう。しかし学生によっては文化的な違いは文系であり，身体や生理的な違いは理系であって遠い話に聞こえるという者もいる。そもそも，世の中のことを深く突き詰めようとすれば文系だとか理系だとかで別れていては理解が進まない。なのに，高校から自分は文系だと深く思い込む学生は，世の中の自然科学に関する情報から遠ざかろうとするし，我々もまたそれを伝えていくことをあきらめかけるときがある。今回の話で言うと，研究の世界では文化人類学と（自然）人類学に別れてしまっているものの，学生の理解には関係の無い話である。文化の違いから来る道具の違いについて思いを寄せてもらい，広い視野を持ってもらうためには，まだまだ授業に工夫が必要なのであろう。今のところ力及ばずといった状況で悶々とする毎日である。

嚥下リハビリテーションチェアの開発

谷川　憲司（デザイン学科）

高齢化社会において、脳血管障害の増加などから嚥下障害を持つ患者が大きく増加している。食事の際に誤嚥すると誤嚥性肺炎になるリスクが高いため、これまでの医療では「胃ろう」を設け胃に直接栄養を入れる処置をとることが多かった。しかし胃ろうは食事の楽しみが無くなるなどQOLの欠点がある。

この実態に挑んでいるのが、浜松リハビリテーション病院である。藤島病院長は、胃ろうを開けずに、嚥下リハビリによって口から物を食べる訓練を行い、最初は寝た姿勢から徐々に起こして行き最終的には食卓で家族と食事をとることを目指している。藤島病院長の指導のもとに高度な嚥下リハビリ診療が充実して「日本一の嚥下リハ病院」と評価され、患者・リハビリ件数も急増している。

●浜松市リハビリテーション病院からの要望

浜松市リハビリテーション病院藤島院長より、嚥下撮影用チェアを改良し、効率よく的確に嚥下リハビリを行うことのできる新しいチェアが要望された。これを受けて、趣旨に賛同する企業と静岡文化芸術大学谷川研究室とで2017年11月に開発チームを結成し検討を開始した。

●実態調査

開発チームでは数度にわたって浜松市リハビリテーション病院を訪問し、嚥下障害者のリハビリ治療の実態を調査した。検査においては、医師が嚥下撮影用チェアを用いて飲み込みの様子をレントゲン撮影で観察し、その人の最も安全で確実に食事をとることが出来る姿勢データ（リクライニング角度・左右の向きなど）を抽出する。作業療法士は摂食時にリハビリ用チェアー等を用いて、背もたれをリクライニングさせ、背中や首回りにクッションを当ててリハビリの姿勢調整を行なっている。しかし、この方法では診断で得られた姿勢データは正確にリハビリに反映できないため姿勢保持の精度が低くなる可能性があり、誤嚥のリスクが懸念される。また、リハビリ姿勢の設定に多くの時間を費やしてしまうことがわかった。

●嚥下リハビリチェア要件の検討

調査と分析の結果、現在の課題を抜本的に解決するものとして、嚥下リハビリをスムースに行うことのできる「嚥下リハビリテーションチェア」の開発を進めることとした。基本的な要件は次の通り。

①嚥下撮影時には、昇降、リクライニング、座面チルト、座面回転が可能なもの。
②嚥下姿勢データ（リクライニング角度・左右の向き角度）を抽出でき、姿勢の再現が可能なこと。
③嚥下レントゲン撮影をするため頭～胸部にかけて金属など撮影の障害となる素材を使用しないこと。
④病院内の移動を可能とするもの。振動を拾わない車輪を使用すること。
⑤身体の左右の傾きや頭の傾き等（リクライニング機構以外の）姿勢調整が可能なこと。

●嚥下リハビチェアの設計・デザイン

嚥下リハビリチェアの開発に当たって、まず市販のリクライニング・チルト車イスと電動昇降機を購入。市販品を改造して機能検討用試作機を作成し、浜松市リハビリテーション病院で検証を行なった。全体構想、寸法、昇降速度など、機能的な仕様が病院の要望に沿ったものであることを確認した。要件が整ったところで、いよいよオリジナルのリハビリチェアの設計・デザインに着手。3DCADによる設計を開始した。設計データが上がり次第、製作に取り掛かるように試作メーカーとの手筈を整えたが、浜松市リハビリテーション病院に試作データを示し確認を行ったところ、改めていくつか要望があり、さらに設計改良に取り組んでいる。他に例のない「嚥下リハビリチェア」の制作に想像以上の時間を要しているが、今年度中に試作機を製作し、浜松市リハビリ病院で使用実験に供する予定である。

●NHK TVによる取材

この取り組みはNHK浜松支局より取材を受けて、「口から食べる喜びを／えん下治療の最前線」といいうタイトルで、NHK静岡の「たっぷり静岡」（2017年12月20日）にて放映された。地域で注目される取り組みとして、今後も追跡取材される予定になっている。

各界から期待されている「嚥下リハビリチェア」の開発を浜松の医・産・学連携によって推進・完成させ、嚥下リハビリ治療に寄与するとともに、新しい産業として地域に貢献できることを願っている。

活動報告　SUAC　Report

デザイナ育成のためのスケッチング・ツールの拡充開発研究

長嶋　洋一（デザイン学科）

21世紀のオープンソース文化の中で「スケッチング（物理コンピューティング）」あるいは「オープンソース・ハードウェア」という領域が生まれた。これはプロトタイピング（ハード/ソフト）の新しい潮流で、理工系でなくても（文系/芸術系/デザイナでも）、実際にコンピュータ・エレクトロニクス応用のシステムを試作・実現してしまうデザイン手法のことである。つまり、単に描くだけでなく、システムの振る舞いまで実際に動くものとして実現する手法をスケッチングと呼ぶ。過去にこの分野の主役となったGainerというインターフェースは、SUACデザイン学生の数多くのインスタレーション作品でも活躍してきた[1]が、技術の進展に伴って生産終了となった。最近ではArduinoがポピュラであるが、単体で簡単な動作をさせる以上の本格的な活用には技術的障壁があり、全国的にもデザイン学生の生み出すインタラクティブ・メディアアートの質の低下（安易な電子工作でストップ）が懸念されている。2018年度SUAC特別研究「デザイナ育成のためのスケッチング・ツールの拡充開発研究」ではこの状況を突破するために、大学院レベルに対応した標準的なスケッチング・ツールの開発研究を行った。本稿では紙面の関係で一部しか紹介できないので、その全体は筆者のサイト[2]および本研究を含む公開サイト[3]を参照されたい。

スケッチングのベースとなるのは写真1のような各種のボードマイコンであり、これらを活用して新しい作品をデザインしていくための汎用プラットフォームとなるような、写真2の「筋電/脳波センサ」、写真3の「触覚/触感センサ」などのシステムをオリジナル開発するとともにWeb公開した。ここで重要となるのが、オープンソース・ソフトウェア文化に従って世界的に普及してきたIDE（統合開発環境）とライブラリ（ソフト部品）の活用である。ArduinoのIDEとProcessingのIDEがほぼ同様の外見であるのはこの典型例で、世界的な標準ライブラリをブラックボックスとして活用する事がポイントである。ホスト側の環境としては、SUACでは開学時から国内に先駆けて完備しているMax/MSP/jitterを活用しており、本研究ではArduinoとの連携のために「Firmata+Maxuino」・「Arduino2Max」・「Arduino-USBMIDI」という3種類のインターフェースを開発/公開した。さらに強力なシステム要素としてPropellerプロセッサとmbedボードの活用についても実例とともに汎用ライブラリを充実させて、実際にデザイン研究科の修了制作でも活用された。

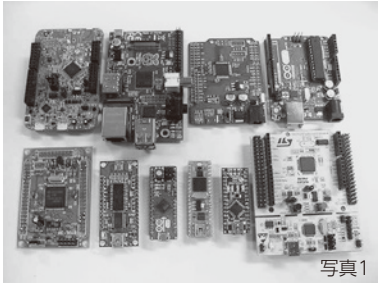


写真1

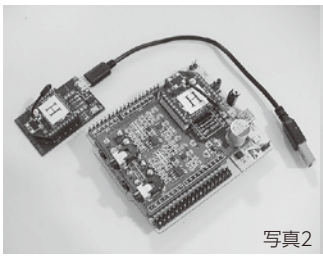


写真2

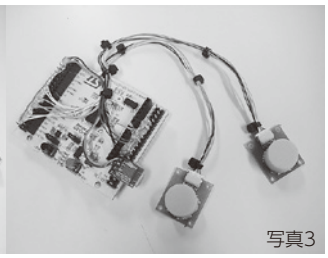


写真3

写真4

このようなスケッチング・ツールによって、生体情報センシング（写真4）やインタラクティブ・メディアアート（写真5）の領域にも応用可能性が拡大し、2018年9月にはポーランド・Poznanでの国際会議ICEC2018でこのテーマについてのTutorial Workshopを開催し[4]、関連する世界の専門家との議論/交流を行って、この研究の先端性を確認できた。当初計画のように、国内先端のスケッチング・ツールが完備したSUACデザイン学部/研究科から、新たな作品が生まれていく潮流を支援していきたい。

写真5

参考URL
（1）http://nagasm.org/1106/installation/
（2）http://nagasm.org/ASL/
（3）http://nagasm.org/Sketching/
（4）http://nagasm.org/ICEC2018workshop/

学校における児童の多様な居場所づくりへの空間的試み

亀井　暁子（デザイン学科）

■はじめに

小学校の動物というと、どの様な風景が浮かぶだろうか。校庭の飼育舎にウサギやニワトリがいたのを思い出される方も多いかもしれない。小学校における動物は、学習指導要領において生活科をはじめ理科、道徳と複数科目で扱われ、生命尊重の観点からも重要視されている。しかし近年、様々な課題から学校での動物飼育は困難を極めている。またそれら困難の中で教育効果への実感が持てず動物飼育を断念する場合もある。

その様な中、2016年より3か年にわたり本学の教員特別研究の助成を受け、「動物介在教育の空間デザイン」について研究を行って来た。また今後は科学研究費の助成を受け、関連するテーマで研究を続ける機会を得た。本稿では、この研究テーマに取り組んでいる動機についてお話させて頂きたい。

■現代の状況に即した学校の動物の環境

現在、学校の動物の飼育にあたり最も多くみられるのは屋外飼育舎である。これは明治期以来、自然について学ぶために設えられた学校の外部空間の一施設として今日まで存続し続けてきた。もちろんこの飼育形式には一定の合理性があり、今後も継続されていくものであろう。しかし今日の教育現場において課題解決が必要な事項も多く含んでいる。また、生命尊重の観点や動物を「同じ生きる仲間」として教育に生かそうとする場合、児童がより動物の生命を身近に感じやすい環境の模索もまた必要であると考えられる。現代の教育現場の状況に即し課題解決に向け動物の飼育環境を技術的に解決するアプローチと共に、学校での動物飼育だけにとらわれない、児童と動物の関わりの場の観点からの環境整備が必要であると考える。

■児童それぞれが居場所を見出すことができる教育空間

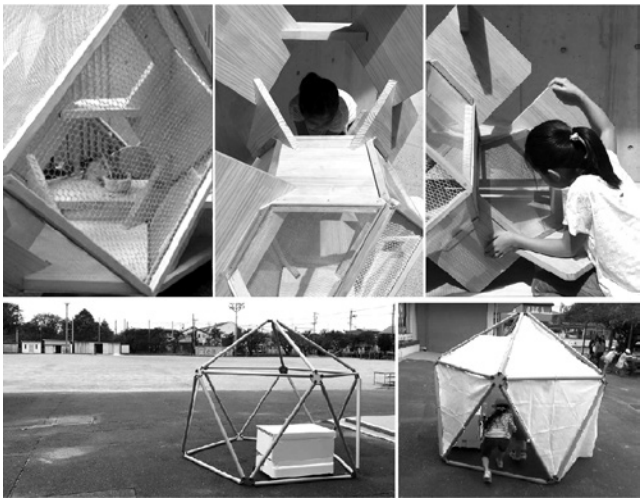
近年、児童が抱える問題やその背景となる家庭環境が多様化し、今までの教育手法が通じず苦慮する場合もあるという声を教育現場から聞いた。また特定の課題を抱える状況でなくとも、児童の心理的居場所づくりが求められている。この様な教育現場の状況に寄り添い、教育空間もまた、それぞれの児童が居場所を見出すことのできる環境を目指すことが出来ないかと考えた。これまで教育空間は、主に授業中の学習の多様性を支えるために教室空間を中心に多くの追究がなされてきた。学習に直接的に関与する諸室が機能性を満たすことは言うまでもなく重要である。しかし同時に、児童がそれぞれの個性に応じて、多様な時間を過ごすことが出来る教育空間の追究がなされるべき時に来ている。この教育空間の多様性の追究のためには、様々なアプローチがあるであろう。その中で、まずは、前述の様に諸課題を抱える動物の存在を契機とすることとした。

動物は生き物であり、その行動は常に変化する。そして、児童の行動に対し応答性のある存在である。その様な動物の存在と児童による関わりは、教育空間において不均質な場を生み出す要素として期待できるものなのではないかと考えた。児童が、応答性のある生きた動物に触れ、生命の手がかりに出会い、生命をいきいきと感じることの出来る教育空間は、一つとして同じ状況の存在しない、多様な変化のある場である。この様な場を志向することは、多様な児童が居場所を見出すことのできる、包容力のある教育空間の実現へと展開しうる可能性がある。

■児童と動物の関わりの場のあり方がもたらすもの

これまでの研究において、児童と動物の関わりの場について、児童と動物の境界のあり方、および、それらを拡張し領域のあり方を問う空間装置を作成し、実際に小学校に設置し、調査をさせて頂いた。調査にご協力頂いた小学校の先生方および児童の皆様に感謝申し上げたい。その結果、環境整備のあり様によって、児童の動物への関心が高まり、動物との関わりの多くの体験が生まれる状況が確認できた。そして更に、直接的に動物と関わる児童の行為の多様さは、それを観察する児童や真似る児童を生み、多様な行為の連鎖を引き起こした。動物を契機に、他の児童との関わりが徐々に親密となる児童の姿もあった。

これら調査から、動物という特殊な存在が媒介することにより、児童相互に新たな関係が生まれ、児童相互の関係が多層で豊かなものとなり、それら行為の連鎖が実に生き生きとした多様な場を生むことが確認できた。また、児童に直接的目的を強要せず、児童が気持ちを整えることを待つ、無目的に滞在可能な空間のあり方も見出した。これら多様な場は、児童それぞれが居場所を見出しうる教育空間への展開可能性を示唆する。今後も継続研究を通じて、不均質で多様な、児童が居場所を見出すことの出来る教育空間のあり方を模索していきたい。



活動報告　SUAC　Report

北アフリカフランス語小説を訳しながら
－「翻訳」をめぐる二つのこと－

石川　清子（国際文化学科）

私の専門領域は現代フランス文学だが、本学着任以来この20年は興味の対象がフランスの旧植民地、とりわけ北アフリカのフランス語小説へと少しずれて、これまでに二冊翻訳を出すことができた。三冊、四冊と続く予定である。翻訳とは本来裏方に徹する仕事であり、学術研究では「ついで」の作業に見られがちだが、翻訳をしてよかったと思うことが二点あったので、以下に記したい。

一つ目は、自分が訳したアルジェリアの作家、アシア・ジェバールをめぐる翻訳をめぐる論集が刊行されたこと。イスラーム圏を代表するこの女性作家の『愛、ファンタジア』（みすず書房、2011年）という小説を訳した際、アルジェリア大使館にも献本した。当時の駐日大使がとても喜んでくださって、パリを拠点に活動するアシア・ジェバール研究会に大使自らメールでご報告くださった。

アシア・ジェバール
（1936 -- 2015）
Djaffar Lesbet 撮影

これを機に、研究会主宰のアメル・シャウアティさんらと交流が始まり、シンポジウムや論集執筆に頻繁に声をかけてもらうようになった。ジェバールは世界20以上の言語で翻訳されている。「他者の言葉で」という副題のもとに、シャウアティ会長は、世界に散らばるジェバールの翻訳者が書いた翻訳論を集めた論集をアルジェの出版社から刊行した。12の言語の翻訳者19名が執筆している。

文学研究者どうしが国境を越えて親交を結ぶ機会は無数にあるが、翻訳者とは従来黒衣に徹して、孤独に仕事を遂行していく人間だと思っている。もちろん、翻訳者なりの苦労や愉しみ、矜持や信念もあるが、それについて言語の異なる翻訳者が語り合うことは殆どない。探偵のような編者の努力に負うところ大だが、この論集を読むと、従来孤立している翻訳者たちが、ジェバールという作家を介して自分たちの仕事を確認しあい議論しているような気分になる。自分が当事者である論集だから当然と言えば当然ではあるが、まるっきり面識のない者たちが翻訳という行為を通じて友愛の共同体を密かに築いていく気がしてくる。作家ジェバールは既に物故者となり、駐日アルジェリア大使も離任なさって数年が経つが、歓待を掟とするマイナーな国の文学を翻訳してよかったと思う出来事である。

二つ目は、北アフリカという「マイナーな」地域の現代小説翻訳コレクション刊行に関われたこと。1980年代頃から、フランス文学は自国文学の衰退に活力を取り戻すべく、かつての植民地だったフランス語圏に目を向け始めた。北アフリカへのまなざしもその流れにある。英語圏のポストコロニアル研究の興隆もこれを後押しした。私は80年後半に出会ったモロッコの作家、タハール・ベン・ジェルーンをきっかけに北アフリカ仏語文学を追いかけてきたが、2012年に一種物好きな研究仲間が集まってマグレブ文学研究会（マグレブはモロッコ、アルジェリア、チュニジアなどの北アフリカ諸国をさす）を結成し、ほそぼそと続いている。

日本で馴染みのない地域の文学研究を続けるには、翻訳による作品紹介が不可欠である。研究会メンバーで知恵を出しあいシリーズのリストを作成し、出版社に打診した。幸い関心を寄せてくださり、2016年から刊行が始まっている。私がまず訳すのは、アルジェリア人の両親をもつフランス人女性映画監督、ヤミナ・ベンギギの映画『移民の記憶』のテキスト版。短編集のような趣で、既に入稿を済ませた。下に掲げたコレクション全体のリストは今後さらに長くなる予定で、訳出する作家はマグレブにルーツをもつものの、その活動拠点は世界各地に分散し、フランス語のみならずアラビア語からの訳も入る。

翻訳は孤独な作業と述べたが、この翻訳シリーズは研究会メンバーのチームワークゆえに実現した。メンバーそれぞれも現在、マグレブの作家のように、日本各地、フランス、アルジェリアとばらばらに散り、実際に会う機会はなかなかないが、ウェブ上で密な連絡がとれる今日この頃である。以上、翻訳をとおして自分にとっての研究の大切さを認識できたこと二点をあげてみた。コレクションを手に取って頂ければ幸いである。

Amel CHAOUATI (dir.), *Traduire Assia Djebar, Alger,* Editions Sédia, 2018.

水声社　マグレブ現代文学翻訳コレクション　叢書〈エル・アトラス〉

既刊：ムルド・フェラウン『貧者の息子』（青柳悦子訳）／ラシード・ミムニ『部族の誇り』（下境真由美訳）／カメル・ダーウド『もうひとつの「異邦人」』（鵜戸聡訳）

近刊：ヤミナ・ベンギギ『移民の記憶』（石川清子訳）／モアメド・ディブ『大きな家』（茨木博史訳）

活動報告　SUAC　Report

「博物館学」+「美術史」が愉しい

小針由紀隆（芸術文化学科）

数年前、学芸員資格課程を履修している学生から、西洋美術史に関する質問を受けた。「美術館や画廊が誕生する以前だと、一般の市民たちは美術品をどこで見ていたのですか」。このように問われたわたしは、「西欧で美術館や画廊が誕生するのは概ね近代以降のことで、近世では美術好きの人たちが画家のアトリエを訪れ、そこで美術品を見せてもらっていたんだよ」と答えた。出し抜けの質問にこう即答したのだが、いま振り返ってみると、この質問は大いに興味深く感じられる。

美術館が次々に制度化され、美術品が展示公開されるのは、「通常」近代以降であった。ここで「通常」と書いたのは、17世紀でも市民たちが美術品を積極的に買い求めるオランダのような新興国があったからである。この時代のオランダ美術の繁栄が、大量の美術作品の購買層であった富裕な市民階級に支えられていたことは広く知られている。市民たちは画家のアトリエで直接絵を購入したり、商人たちの開く街頭の市で絵を入手しえたのだった。とはいえ、美術館や美術専門のギャラリーは、まだ創設されていなかった。

フランスやイタリアでみると、近世の市民たちが美術品をみるには、王侯貴族の宮殿や邸館に入り込まなくてはならず、実際にそれは困難であった。だがイタリア、特にローマの市民たちが、現存作家の新作、すなわちコンテンポラリー・アートに触れる機会を持たなかったかというと、決してそうではなかった。ローマのパンテオンとサン・ジョヴァンニ・デコッラート聖堂を会場に、キリスト教の宗教団体が年次展を開催していて、そこで出品画を鑑賞することは可能であった。

わたしはここ数年こうした年次展の詳細を把握したいと思っていた。パンテオンのポルティコ（玄関前の屋根付柱廊）や聖堂の回廊が会場となっていたことは知っていたが、それ以上のことは不明のままであった。美術館も学芸員も不在の時代だったことから、展覧会カタログはもとより、出品作家・作品のリストも作成されていなかった。記録史料の欠落から、調べたくても調べようがないのである。美術史の研究者であるわたしは、何故かこの点が妙に気になり、どうしても知りたくなっていた。

今年になり、ちょっとだけ考える糸口が見えてきた。まったくの個人的興味から、17世紀イタリアの画家サルヴァトール・ローザ（1615-1673）に関する本を買い集めていたのだが、その中のひとつに英国の美術史家A.ホアーの労作、『サルヴァトール・ローザの書簡』（2018年）があった。この2巻本は、ローザが友人に宛てた400通余の書簡をイタリア語の原文で紹介し、英訳を対照させる形式をとっている。購入後、時間のあるときにページをめくっていると、当時のローマにおける年次展に関する記述がいくつか見つかったのだ。

もちろん書簡の記述は断片的で、年次展の全貌を知るには程遠いのだが、それでも当時の美術事情と合わせて読んでいくと、ローザが公衆に開かれた展覧会の意味を誰よりも深く考えていたことに気づかされる。ローザの年次展への参加には、従来の画家とパトロンの関係を改めようとする姿勢が見え隠れしている。近世の画家たちは、通例特定のパトロンから注文をうけ、制作・納品・支払いといった一連の過程を踏んでいたが、ローザはパトロンへの依存を嫌い、展覧会を利用して自分の名を広めることを考えていた。つまり誰が所有者になるか分からないのに、作品を制作・出品していたのである。画家の当初の意図は、展覧会への出品を通して自分の存在を公衆に知ってもらうことにあり、作品の買い手探しは展覧会終了後でもよかったのである。

19世紀がすすむと、画家たちは画廊で個展を開いて名を広め、その画廊に買い手を見つけてもらうようになるが、ローザは展覧会を利用するやり方を逸早く実践していた。パトロンへの依存を拒否する新しいタイプの近代的芸術家がここにいたのである。こうした話は「博物館学」の研究書をいくら読んでも、絶対に知ることはできない。「美術史」の観点から探らない限り、当時の事情を知ることは難しい。ここに書いたのは、「博物館学」と「美術史」の複眼的視点から見えてくる事例のひとつであるが、質問してくれた学生には感謝している。その学生はすでに卒業してしまったが、今度会ったときには話題にしてみよう。きっと忘れてしまっているだろうが。以上近況報告として。

サン・ジョヴァンニ・デコッラート聖堂（ローマ）の回廊

活動報告　SUAC　Report

「自治体戦略2040構想」と地方自治の今後
－魅力ある地域づくりと法学－

村中　洋介（文化政策学科）

平成30年7月、総務省の自治体戦略2040構想研究会が第2次報告書を公表し、その後、第32次地方制度調査会が発足した。地方が様々な課題を抱える中で、地方公共団体が歩むべき方向性は未だ不明瞭なものといわざるを得ない。各地での異常気象ともいうべき猛暑や豪雨災害のほか、地震大国日本においては潜在的に災害のリスクも高く災害・防災の課題も重要である。また、人口減少社会の中で、都市部農村部間の生活の質に格差が生じることも懸念され、特に農村部において今後どのように生活を維持していくかも課題となるだろう。

同報告では、2040年頃を見据えた地方公共団体の課題を示し、2040年に向けた制度・システム改革について、さらには行政のあり方についての制度設計が必要であることが示されている。

人口減少社会において地方の抱える問題は、産業の担い手不足や保育、医療、介護といった福祉の問題、インフラや公共交通、防災にかかる問題など多岐にわたる。また都市部においては、超高齢化が進む中で、急増する高齢者に対する支援をいかに行うかといった課題が生じることになる。ある意味では、「今のうちから」労働者―それ以外のものも含めた人口の分散化について国をあげて行わなければ、都市部における問題は深刻さを増す可能性もあるだろう。

こうした課題は、静岡県（内の市町）や浜松市も例外ではない。県内の市町は、現在でも人口減少が進んでいるが、今後もこうした傾向は継続するものとされており、人口減少の中で、どのように産業や市民生活の質を維持していくかが課題となる。

この報告書から思うに、わが国のように、各地域区画を全てどこかの市町村、都道府県に属させ事務を行うとする地方自治制度では、少なくとも市町村のサービスは維持できない段階が目前に迫っていると考えられる。

経済成長が進み、人口も維持または増加する時代、国や地方の財政も安定または潤っているという状況であればまだしも、財政的側面を除いたとしても、深刻な状況に変わりはなく、こうした状況の中では、行政の効率化、スリム化、無駄な事業の廃止も必要となろう。我が国は、鉄道網、道路網が全国津々浦々にまで整備されており、このため過疎地域とされる各集落が人口減少、住民不在となったとしてもインフラが維持され続けている状況が続いている。しかし、ある程度の段階でそうした地域を市町村の区画から分離するなどして、市町村行政を持続可能とするものとし、そうした地域について包括団体や国による行政等を行うといった、アメリカのような市町村の空白地帯を認めるという地方自治制度も考えていくべきではないだろうか。

市町村合併により、農村部は都市部の地方公共団体に吸収された地域も多くある。しかしこうした合併は、2040年やそれ以降のことを考えたものではなく、目先の利益を考え、問題を先送りしたものとの評価もできるだろう。都市部は今後の高齢化に備え、コンパクトシティの構築、まちづくり、また過密を避ける分散化といった施策に目を向け、持続可能な都市形態を探る必要があり、農村部は、都市部とは隔絶された中であったとしても、その地域の魅力をいかに発信し、農村地域の未来を探ることによって、持続可能な農村地域を目指すべきであるだろう。この際、都市と農村が一体となった団体は政策の意思決定においても、資源の分配においても効率的、効果的な行政運営が行えるものではないだろう。

私は、10年以上前に環境省に炭素税を取り入れ、（二酸化炭素を排出する）産業・都市部から税を取り、森林、農地面積に応じて農村部に分配するよう提案したことがある。魅力ある森林、農地を維持するためにも費用はかかり、労働者を使うためには賃金を支払う必要もある。そのための財源も必要となろう。

国は、持続可能な都市部の運営と、持続可能な農村部の運営に向けて、行政のあり方、制度について改める必要があることを認識し、検討に入っているものと思われる。しかし、国に頼るばかりでなく、地方は、その地域の魅力を発信する努力をしていかなければならず、これを怠ると、その地に定住し、または来訪する人すらいなくなることを自認すべきであろう。

2019年から浜松市に移り住んで、当該地域の法令遵守、マナーを守るということについて、市民、行政ともに意識が不十分であると感じることに直面した。魅力ある地域として、秩序やルールを守ることができるということも重要であろう。そのためには、法学教育が必要であると思われる。多くの日本人が、敢えて治安の悪い地域に海外旅行には行きたくないと思うように、日本国内において移住や旅行を行う際に、秩序の無い地域に行きたいと思うものは多くないだろう。今後の地方自治、魅力ある地方の発信の前提としての「法学」を各地域には意識してもらいたい。特に行政は、法を前提として施策の実現を図らなければならないのであって、2040年に向けて制度転換等がなされる中で、いかにして持続可能な地域の実現を図るか、その前提としての法学をしっかりと学んだ上での対応が求められる。

平成30年度　文化・芸術研究センター事業実績

〈イベント・シンポジウム〉

イベント名	代表者		実 施 内 容
	学科	氏名	
SUAC映画祭	芸術文化学科	高島 知佐子	日程：６月29日（金）～７月１日（日） 会場：鍛冶町商店街、鴨江アートセンター、本学409グループ演習室 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 助成：（公財）浜松市文化振興財団 協力：㈱アサヒコーポレーション、木下恵介記念館、鴨江アートセンター、ゆりの木通り商店街 内容：６～７月に３日間の映画祭を開催した。作品を上映するだけではなく、上映後に毎回、映画にちなんだワークショップやトークイベントを行うことで、映画祭を通した文化理解と地域交流を深めた。 参加者数：延べ346人
UD絵本コンクール2018 及び 世界のバリアフリー児童図書展2017、 並びに UD絵本WSの開催	文化政策学科	林 佐和子	日程：（表彰式）11月３日（土） （展示会）11月17日（土）～11月22日（木） 会場：静岡文化芸術大学　ギャラリー 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 後援：静岡県、静岡県教育委員会ほか 内容：子ども部門16点、高校生部門８点、一般部門13点の計37点の応募があった。その中から、ユニバーサルデザイン研究賞１点、審査委員長特別賞１点、子ども部門優秀賞２点、佳作４点、高校生部門佳作１点、一般部門優秀賞1点（学生大賞兼）、佳作４点が選ばれた。11月17日～22日の６日間、応募作品の展示会を本学ギャラリーで開催し、154人の来場者があった。また入賞作品などは、３月11～15日には浜松市役所１Fロビーで、３月23～24日には東京・大崎のゲートシティ大崎で展示が行われた。 同時開催：世界のバリアフリー児童図書展2017 日程：７月７日～７月10日 会場：静岡文化芸術大学　総合演習室 来場者数：172名 参加者数：延べ410人
第5回SUAC&SPAC連携事業 現代劇上演とシンポジウム	芸術文化学科	梅若 猶彦	日時：10月18日（木）18：30～　シンポジウム 19：45開始 会場：静岡文化芸術大学　講堂 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 共催：SPAC-静岡県舞台芸術センター 内容：パフォーマンス「Entranced 2」（演出／出演：Aida Redza、配役：舘野 百代（SPAC俳優）、大内 米治（SPAC俳優）演奏：Eric N'Kaoua（ピアニスト、フランス）、他。 シンポジウムでは、Gareth Richards氏（アジアの文化圏の境界線（意訳））、Monica Alcantar氏（能の子方の原型（意訳））、Hardy Shafii 氏（Main Teri）の発表があった。総括として高田和文理事が公演の批評を述べ終了した。 参加者数：80人
第３回 フェスタ・ジュリーナ na　SUAC　２０１８	国際文化学科	池上 重弘	日時：７月７日（土）　11：00～ 会場：静岡文化芸術大学　学生食堂 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター、日伯交流協会 後援：静岡県教育委員会、浜松市教育委員会、在浜松ブラジル総領事館、他 内容：ブラジルで行われている伝統的な祭り、フェスタ・ジュニーナを装飾、飲食、ゲームなどのレクリエーションなどの面で再現するに加え、６言語のキャンパスツアーによって、外国人の若者やその保護者に日本の大学を知ってもらう機会とした。また、日本人向けに外国の文化を知ることができる展示コーナーを用意した。今年度は学生実行委員会、当日学生ボランティアにブラジルだけでなく、フィリピン、インドネシア、韓国につながる学生が参加した。また、より多国籍なイベントとなるようにフィリピンの軽食や飲み物を用意したり、ダンス部門ではインドネシアのガムランの演奏とダンスを招いたりした。 参加者数：300人
バリ島の影絵人形芝居 ワヤン・クリッ レクチャー&パフォーマンス	芸術文化学科	梅田 英春	日時：７月13日（金）18：30～、７月15日（日）14：30～ 会場：（7/13）自由創造工房、（7/15）鴨江アートセンター 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 後援：浜松市 内容：大学におけるレクチャー（13日）とマハーバーラタの創作パフォーマンス（15日）にわけて行った。レクチャーではインドにおけるマハーバーラタの歴史、10世紀以降に始まったインドネシア版マハーバーラタ創作物語クカウィンの概要について行った。15日のパフォーマンスでは沖縄の組踊をマハーバーラタに置き換え創作したものである。上演中は舞台の周りを自由に動いて鑑賞する新しい手法を取った。 参加者数：127人

イベント名	代表者		実 施 内 容
	学科	氏名	
UD（ユニバーサルデザイン）ウィーク ～人の可能性を活かすデザインを考える～	デザイン学科	小浜 朋子	日時：11月12日（月）～11月16（金）　9：00～19：00 会場：自由創造工房、278大講義室、UDラボ 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 内容：UDに関係する企業、行政、教育の関係者が集い、SUACの活動内容を共有しながら、「多様な人の可能性を尊重し活かす」というコンセプトを基に、今後のUDの方向性を議論することができた。参加者数は想定より少なかったが、初めてUDに興味を持って来られた方も多く細やかなコミュニケーションを通じて、新たなネットワークが広がった。一番の手ごたえは、多くの学生のUDの理解を深めることができたことである。 参加人数：延べ350人
「SUACアートの最前線3Days」	芸術文化学科	松本 茂章 他	日時：11月30日（金）　18：30～21：00 12月１日（土）　10：00～13：00 12月２日（日）　16：30～19：00 会場：鴨江アートセンター（11/30）、講堂（12/1）、万年橋パークビル（12/2） 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 協力：鴨江アートセンター、万年橋パークビル 内容：アートマネージメントをかがり糸にして、「観光」「多文化共生」「空間再構築」の専門家を招き、熱っぽい議論を繰り広げた。会場を本学に加えて鴨江アートセンター、万年橋パークビルという2つの文化拠点を会場に選んだことにより館長・社長の交流を加速させた。学生たちの協力を得て浜松市に点在する文化資源の紹介に努め、今後多方面で活用されると期待される。 参加人数：延べ205人
第5回 産学協同国際デザイン ワークショップ	デザイン学科	高山 靖子	実施期間：４月１日（日）～３月31日（日） 会場：自由創造工房、富士山静岡空港、下田市 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 内容：イズミル経済大学（トルコ）と本学のデザイン・文化政策両学部生との混成チームにより「富士山静岡空港における静岡の食プロモーション」をテーマにデザインワークショップを実施した。県内の関連施設見学、下田市での食文化調査等を行った後、企業のデザイナーの方々から指導を受けて提案をまとめ発表した。その後これまでの交流活動をまとめた５周年記念展を開催し、トルコ共和国大使館において報告をした。また、一連の活動記録として、５周年記念と2018年の活動記録冊子を製作した。 参加者数：50人
ホスピタルアートプロジェクト しずおか	芸術文化学科	高島 知佐子	実施期間：４月１日（日）～３月31日（日） 会場：静岡県立こども病院、浜松労災病院 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 共催：静岡県立こども病院、浜松労災病院 内容：浜松労災病院では、本学で自助具を作るプロジェクトを進めているJDPの協力を得て、同病院内（外来と病棟の複数個所）で自助具展を開催した。静岡こども病院では、昨年度開催した「いきもの作り」ワークショップに続く活動として、「まちをつくろう」と冠したワークショップを入院患者、ご家族、職員等を対象に開催し、後日病院内で作品展を開催した。 参加者数：延べ約1,000人
浜松市の中山間地域再生の可能性と課題についてのシンポジウム「2019まちむらリレーション市民交流会議～浜松の中山間地域の可能性を考える～」	文化政策学科	舩戸 修一	日時：１月25日（金）13：00～16：15 会場：浜北文化センター 主催：浜松市、静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 内容：天竜区佐久間町のある集落における舩戸ゼミの調査結果を発表した。この発表ではアンケート調査から、帰郷意志の有無に関わらずその意志を親に伝えることが難しい理由を説明し、その意志を表明することで集落維持につながる方策を提案した。 参加者数：120人
メディアデザインウィーク2019	デザイン学科	長嶋 洋一	概要：学生作品の展示、関連分野の専門家による講演、ワークショップで構成されるイベントで、今年で７年目の開催となった。 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 後援：（公財）浜松市文化振興財団 【学生展示】 日時：２月１日（金）～８日（金）12：30～18：30 会場：静岡文化芸術大学　ギャラリー 内容：本学デザイン学部３・２年生作品を中心に展示・上映を行った。 【ワークショップ】 日時：２月２日（土）13：00～18：30、２月３日（日）10：30～16：30 会場：静岡文化芸術大学　マルチメディア室 講師：長嶋 洋一、照岡 正樹 ゲストスピーカー：辻下 守弘、小貫 睦巳 内容：メディア、デザインの領域で注目されている「スケッチング」（物理コンピューティング）をテーマとしたワークショップを開催。

イベント名	代表者		実　施　内　容
	学科	氏名	
メディアデザインウィーク2019	デザイン学科	長嶋 洋一	【講演会】 講演１「絵とヘタうま」 日時：１月31日（木）18：30～20：30 会場：静岡文化芸術大学　南280教室 講師：都築 潤（イラストレーター） 内容：「絵の魅力」等に関する講演。 講演２「メディア芸術としてのゲームとパックマン」 日時：２月１日（金）18：30～20：30 会場：静岡文化芸術大学　南278教室 講師：岩谷 徹（ゲームクリエイター） 共催：本学公開講座「イブニングレクチャー」との共催 内容：世界的にヒットしたユニークで親しみやすいゲーム「パックマン」を制作した岩谷氏が、ゲーム制作の魅力、面白さ、意義について語る。 講演３「Art in Career ～Artと技術でエンターテイメントの新領域を切り開いた開拓者たち」 日時：２月４日（月）18：00～20：00 会場：静岡文化芸術大学　講堂 講師：真鍋 大度（インタラクションデザイナー）、花房 伸行（映像作家・演出家）、内田 治宏（CG制作会社執行役員） 司会：菱沼 妙子（浜松アーツ＆クリエイション） 共催：（公財）浜松市文化振興財団（浜松アーツ＆クリエイション）との共同事業 内容：メディアアーティストの真鍋大度氏ら4人の講師による「メディアアート」等に関するディスカッション形式の講演。 講演４「東映動画からハイジ、ピカチューまでアニメの仕事を振り返って」 日時：２月５日（火）18：30～20：30 会場：静岡文化芸術大学　南278教室 講師：小田部 羊一（アニメーター） 聞き手：面高 さやか（本学非常勤講師） 共催：本学公開講座「イブニングレクチャー」との共催 内容：小田部氏の手掛けた数々のアニメーションの仕事から、任天堂のマリオ、ピカチューまで振り返りつつ、日本のアニメーションの発展の歴史について、対談形式で語る。 講演５「未来のつくりかた／デザインにとって一番大切なもの。人にとって一番大切なもの」 日時：２月６日（水）18：30～20：30 会場：静岡文化芸術大学　南280教室 講師：和田 智（カー＆プロダクトデザイナー） 内容：「カーデザイン」等に関する講演。 講演６「ソニーはなぜ銀座に公園をつくったのか？～新しいブランドコミュニケーションのかたち～」 日時：２月７日（木）18：30～20：30 会場：静岡文化芸術大学　南176教室 講師：永野 大輔（ソニー企業社長） 聞き手：中西 哲生（スポーツジャーナリスト） 共催：本学公開講座「イブニングレクチャー」との共催 内容：ソニーが銀座の中心に「公園」をつくる。しかも2020年秋にかけての「第一段階オープン」で、様々な実験を繰り返し、そこから得られた知見をもとに、2022年ふるバージョンの「銀座ソニーパーク」を完成させるという。ダイナミックに変わりゆく東京のど真ん中で、ソニーは何を仕掛けようとしているのか？永野社長と親交があり、スポーツの知見から社会をキックする中西氏との対談によってプロジェクトの真意と目指す理想の「公園像」について明かしていく。 講演７「動物たちのしあわせの瞬間を撮る」 日時：２月８日（金）18：30～20：30 会場：静岡文化芸術大学　南280教室 講師：福田 幸広（動物写真家） 内容：「動物の撮影方法」等に関する講演。 参加者数：延べ600人
多様な「科学」に関する 啓蒙的な複合イベント	デザイン学科	的場 ひろし	日時：3月28日（木）～5月31日（金） 会場：図書館・情報センター内 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 内容：展示のテーマである「電磁波」に関する縦長図表を制作し、図書館・情報センター内の展示スペースに設置し、図表の手間いにテーブルを置き関連蔵書50冊の陳列を行った。また、静岡大学、浜松医科大学の専門家にも協力を頂いた。本展示は多くの図書館来場者に今日もを持って頂けたことが確認された。新入生や新たな図書館利用者へも本店時をアピールするために、年度を越えて、５月まで引き続き展示することとした。 参加者数：延べ200人

〈地域貢献・連携事業〉

イベント名	実施内容（実績報告書）
第19回特別公開講座 「薪能」	日時：10月３日（水）18：30～、４日（木）18：00～ 会場：４日 本学 講堂、５日 本学 講堂 主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター 内容：３日（水）は、能講座を実施し、「室町人の見た地獄」と題して、愛知教育大学教育学部の鷹巣純教授による講演、プロジェクト参加学生による能「求塚」の解説を実施、４日（木）は、本学・講堂（屋内）において新作狂言「忠犬ハチ公」、能「求塚」を上演し、二日間で延べ580人の市民が来場した。
前期公開講座 「トルコの魅力」 全３回講座	６月16日（土）：（受講者：200人） 「トルコの食文化・歴史と魅力」 講師：鈴木 董（東京大学名誉教授、トルコ歴史学協会名誉会員） ７月21日（土）：（受講者：140人） 「トルコの花々や美術」 講師：ヤマンラール　水野 美奈子（元龍谷大学　教授） ９月22日（土）：（受講者：170人） 「トルコ・人々の魅力」 講師：遠山 敦子（静岡県立富士山世界遺産センター館長、公益財団法人トヨタ財団理事長）
後期公開講座 「イブニングレクチャー」	１月16日（水）：（受講者150人） 「ちのかたちとしての建築」 講師：藤村 龍至（建築家、東京藝術大学准教授、RFA主宰）
後期公開講座 「メディアデザインウィーク イブニングレクチャー」	２月1日（金）：（受講者52人） 「メディア芸術としてのゲームとパックマン」 講師：岩谷 徹（ゲームクリエイター、東京工芸大学教授） ２月５日（火）：（受講者93人） 「東映動画からハイジ、ピカチューまで　アニメの仕事を振り返って」 講師：小田部 羊一（アニメーター） 聞き手：面高 さやか（本学非常勤講師） ２月７日（木）：（受講者77人） 「ソニーはなぜ銀座に公園をつくったのか？ ～新しいブランドコミュニケーションのかたち～」 講師：永野 大輔（ソニー企業株式会社代表取締役） 中西 哲生（スポーツリスト）
夏季公開工房	９月１日（土）～２日（日）　本学 自由創造工房 ①「銅版画を制作しよう」 講師：佐藤 聖徳教授（デザイン学科） ②「石膏デッサンを描いてみよう」 講師：山本 一樹教授（デザイン学科） ③「テキスタイル　手織りに挑戦！」 講師：種村 興治氏・桑原 壽子氏（テキスタイル外部講師）
春季公開工房	３月16日（土）・17日（日）　本学 自由創造工房 ①「銅版画を制作しよう」 講師：佐藤 聖徳教授（デザイン学科） ②「石膏デッサンを描いてみよう」 講師：山本 一樹教授（デザイン学科） ③「テキスタイル　手織りに挑戦！」 講師：種村 興治氏・桑原 壽子氏（テキスタイル外部講師）
文化芸術セミナー 「室内楽演奏会2018」	第１回：７月21日（土） 「音楽の力『琉球古典音楽と舞踊』」 出演：山内 昌也（三線）、西村 綾乃（舞踊）、佐久本 純（三線）、林 杏佳（箏） 第２回：「サロンへようこそ～貴族の愛したバロック音楽～」 演奏：青島 由香（フラウト・トラヴェルソ）、櫻井 茂（ヴィオラ・ダ・ガンバ）、戸﨑 廣乃（チェンバロ） 講師：上山 典子（本学芸術文化学科　准教授） 第３回：「交差する管楽器の世界」 出演：栂井 秀方（ローランド）、中島 洋（ヤマハ）、伊豆 裕一（本学デザイン学科教授）、峯 郁郎（本学デザイン学科　教授） 演奏：小池 真梨（エアロフォン）、川村 菜穂子（ピアノ）、カジュアルセッションバンド
巡回展 「工芸継承　東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」	12月６日（木）～12月19日（水）　１４日間 会場：ギャラリー、中央ホール、総合演習室 参加費：無料 参加者数：556人 概要：国立民俗博物館（「民博」）にて開催中（H30.9.13～11.27）の特別展「工芸継承－東北発、日本インダストリアルデザインの原点」の巡回展として、民博と共同で開催した。 展示内容は、昭和３年に仙台市に設置された国立工芸指導所の研究・開発した試作品・資料が主で、宮城の学生と若手クラフトマンのワークショップ作品及び工芸技術を継承した若手クラフトマンの作品も展示した。

■ 第19回特別公開講座　新作能「竜宮小僧」

第一夜　能講座　10月9日（水）　午後6時30分開演　（開場　午後6時）
会場：静岡文化芸術大学・講堂
講演：「東海地域の能楽史」
講師：飯塚　恵理人（椙山女学園大学 文化情報学部 教授）
※学生プロジェクトチームによる「竜宮小僧」のストーリー紹介もあります。
受講料：第一夜・第二夜共通（通し券）、一般（前売・当日）3,000円、本学学生・高校生以下 無料

第二夜　新作能　10月10日（木）　開場：午後5時　開演：午後6時
会場：静岡文化芸術大学・講堂
受講料：第一夜・第二夜共通（通し券）、一般（前売・当日）3,000円、本学学生・高校生以下 無料
【能】：「竜宮小僧（りゅうぐうこぞう）」　作　梅若 猶彦
竜宮小僧　井上 真珠乃、尉　梅若 猶彦、姥　泉 雅一郎、旅僧　福王 和幸、処の者　井上 松次郎　他
※チケットは、チケットぴあ（Pコード：786-819）、アクトシティ浜松チケットセンター（窓口販売のみ/10～19時）
HCFオンラインショップ http://www.hcf.or.jp　にてご購入いただけます。

■ 静岡文化芸術大学　後期公開講座　『これからのユニバーサルデザイン～多様性を受け入れる社会とは～』

第１回　『色弱のお医者さんに学ぶ　カラーユニバーサルデザイン』
日　時：10月5日（土）午後2時から午後4時（開場：午後1時30分）
会　場：南278講義室
講　師：岡部 正隆　（東京慈恵会医科大学　解剖学講座　教授）
受講料：無料（要申込）※受講資格 高校生以上、募集定員 150名

第２回　『音のユニバーサルデザイン化』～ＳｏｕｎｄＵＤ推進コンソーシアムの取組み～
日　時：10月26日（土）午後2時から午後4時（開場：午後1時30分）
会　場：南278講義室（入場無料・要申込）
講　師：瀬戸 優樹　（ヤマハ株式会社クラウドビジネス推進部　　ＳｏｕｎｄＵＤ推進コンソーシアム事務局長）
受講料：無料（要申込）※受講資格 高校生以上、募集定員 150名

第３回　『移動に関する社会的課題とこれからのモビリティ』
日　時：11月16日（土）午後2時から午後4時（開場：午後1時30分）
会　場：講堂（入場無料・要申込）
講　師：森口 将之　（ジャーナリスト、㈱モビリシティ代表）
受講料：無料（要申込）※受講資格 高校生以上、募集定員 150名

申込方法：ホームページ・FAX・電話のいずれかでお申込ください。お申し込みの際には、氏名（フリガナ）、郵便番号、住所、電話番号、受講者区分（一般・高校生・本学学生）、受講希望日をお知らせください。
申 込 先：ホームページ　https://www.suac.ac.jp/　／　Fax：053-457-6123　／　Tel：053-457-6105

■ 静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター主催　文化・芸術セミナー

「調律師・村上輝久のレクチャーと田村明子のピアノ・コンサート」
レクチャー：村上 輝久
ピアノ演奏：田村 明子
司会・聞き手：峯 郁郎　(静岡文化芸術大学教授　文化・芸術研究センター長)
日　　時：12月12日（木）午後6時30分開演（午後6時開場）
会　　場：静岡文化芸術大学　講堂
入　　場：無料（要申込）
申込方法：E-mail・FAXのいずれかでお申込ください。お申し込みの際には、氏名（フリガナ）、参加人数、郵便番号、住所、電話番号（FAXの方はFAX番号を添えること）を記載してください。なお、E-mailでお申込の方は、タイトル・件名に「ピアノ、レクチャーとコンサート希望」と記載してください。
申 込 先：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
E-mail：acrc@suac.ac.jp ／ Fax：053-457-6123

Art & Culture
文化と芸術
文化・芸術研究センター ニュースレター
Vol.30
September 2019
発　行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
（事務局　静岡文化芸術大学　地域連携室）

VEGETABLE OIL INK